



大阪商業大学
FD ニュースレター

第11号

2013年3月発行

《第4回 FD 研修会》

三者協働型 アクティブラーニングの展開
～LA 讃歌～

2012年10月10日

於：大阪商業大学 本館6階 大会議室

講師：関西大学 教育推進部教授

三 浦 真 琴

《第4回 FD 研修会》

三者協働型 アクティブラーニングの展開
～LA 讃歌～

2012年10月10日

於：大阪商業大学 本館6階 大会議室

講師：関西大学 教育推進部教授

三 浦 真 琴

* 本報告書は2012年10月10日に大阪商業大学で開催されたFD研修会での講師：三浦真琴先生の講演要旨をまとめたものである。

目 次

はじめに

1. パラダイムシフト	1
2. LA (Learning Assistant) という発想	3
3. PBL 型授業について	7
4. 参考資料	11

三者協働型 アクティブ・ラーニングの展開 ～LA 讃歌～

はじめに

いささか旧聞に属することで恐縮ですが、1996年に当時のIDE（日本民主教育協会）会長の天城勲さんの肝いりで、9名がアメリカ東海岸の北部へ渡りました。「アメリカの高等教育の現状を肌で感じる」という目的のもと、メンバーは桜美林の副学長や、リクルートリサーチ取締役（いずれも当時）などで構成されておりました。私は付き人として同行しましたが、大いに衝撃を受けました。

1. パラダイムシフト

渡米を前にFDについての勉強会を開き、高等教育で犯してしまった一つの失敗が研究機能の肥大化であることを確認しました。教育機関として誕生した大学に研究機能が付随したこと自体は問題ではないのですが、こちらが本道であるとの誤解が生じ、研究業績がいたずらに偏重されるようになりました。この歴史、趨勢に対し、researchと同じぐらいに、いや、それ以上にteachingが大事であるとするのがFDのスタンスですが、アメリカで「FDとは？」と問われた時に“from research to teaching”と答えたところ、言下にそれは違うと指摘されたのです。「私たちは今、“from teaching to learning”のフェーズにいる」、このように言われました。事前の勉強会で目にした資料に学習心理学関係のものが多かったことが想起されましたが、詳細は分かりませんでした。

世界で最初の大学はボローニャに誕生しました。それは学びたい人、教えたい人が集まり自然に発生した知的なギルドーウニベルシタス（universitas）であり、基本的に学生を中心に据えた組織でした。学生が学びたいこと、教えを請う方法などは学生が決めていた、ということです。ところが、その後に来たパリ大学（現ソルボンヌ大学）が、その後、世界にあまねく広まる「教師中心の大学」モデルとなります。実はここにも大学のもう一つの失敗があったのです。この長きに亘る失敗から抜け出そうというのが、90年代半ばにおけるアメリカの大学の取組でした。研究への傾斜に対する教育の復活、復権、これも大学の原点に回帰する動きですが、学生を大学の中心に据えるというもう一つの原点の意義が認識されたということなのです。

このことを知った時、私の中で課題が整理されました。いや、整理されたように感じました。少々、乱暴な言い方になりますが、遅ればせながら日本でそろそろと始まったFDは、当初は“how to teach”に特化をしたものでした。“How to teach”に重きを置くことには、先生にとって教えやすく便利な教授法がクローズアップされるなど、教師の都合が優先さ

れてしまうという欠点があります。ところが“how to learn”に軸足を置くと、どうしたら学生が楽しく学ぶことができるか、学ぶ意義を体感できるかという発想が生まれます。さらに“what to teach”、そもそも教師は大学で学生に何を教えるべきなのか、同時に“what not to teach”、つまり何を意図的に教えないでおくべきなのかということも真摯に考え直すべきことなのだと思います。

ラーニングを尊重するというのは、学生の学びを尊重するということです。それは学生が学んで楽しい、面白い、そして、うれしい、もっと学びたいという気持ちを持てるようにすることです。それを目指すのならば、教師は自分が持っている知識を断片として転移をするようなティーチングをしてはいけないのだと気が付きます。

学生は高校を卒業するまでに、問いに対して答えが必ず一つあり、「問いと答えの間が短ければ短いほど美しい、善だ。」というフォーマットを刷り込まれています。しかも、それが実に浅く、狭い範囲での出来事であるとは知らされずに、です。

実際、日常生活の中では、問いに対する最適解が必ず存在するとは限りません。今日は正解でも、それが明日の正解であるとは限りません。実社会に出ればよくあることです。そういうことを知らないままの学生を世に送り出していいのだろうか、そんな問い掛けも自分の中にありました。

だとするならば、大学生活で最低限見つけてほしいことは、自分でまず問いを発見すること、その問いに対する答えを自分なりに模索してみることに、その知的なプロセスを体験すること、なのではないか、そういったことを強く思うようになってきました。

授業実践の場で実際に学生たちに知的な旅を体験してもらうためには、実はもう一つ乗り越えなければならない壁があります。年を経るごとにその思いは強くなっています。学生との年齢差がさほど大きくない時には知的アドベンチャーの手ほどきをする、大概の学生は目を輝かせ、頷いてくれましたが、最近は必ずしもそうではないと感ずることが時々あります。

なぜだろうと思って親しくなった学生に聞きますと、「学生から見ると先生というのはその道の成功者です。僕たちは先生だからそれができるんだと思ってしまうのです」と言われました。成功者と思われるのは、いかにも面映ゆく、本意ではないのですが、年齢（差）がそのように感じさせてしまうのかもしれない。このギャップを克服し、学生に知的な冒険を楽しんでもらうためには、年齢が近く、同じような知的探検を体験をした人に、その意味や価値、わくわく感、挫折感などを伝えるサポーターのような存在があればよいなと考え始めるようになりました。それが今日みなさまにご紹介するラーニング・アシスタント（LA）制度の背景にあります。

2. LA (Learning Assistant) という発想

さて、この「ラーニング・アシスタント」ですが、主に初年次学生を対象とした科目において、「知識の転移」という教師中心の発想から脱した「知的プロセス」の想像的・創造的体験を核とする授業をわかりやすい「かたち」で展開するためという位置づけ、意味づけの存在です。

もう少し具体的に申し上げます。本学にはスタディスキルという科目があります。当初は「スタディスキルを身につける」というタイトルでしたが「スタディスキルゼミ」に変わり、その内容に応じて科目を細分化し、現在は例えば「スタディスキルゼミ（課題探求）」というかたちで6種類の科目が立ち上がっています。

これとは別に「論理的に考える」「文章力をみがく」などの初年次を主な対象学年とした全学共通科目があります。これらの科目こそが高校までの勉強の習慣から脱出し、大学での学習のハビトゥスを身につけるためのステージとなります。

原則として、LA（ラーニング・アシスタント）は、自らの既習の科目において学習支援をすることになっていきますから、教師はそれぞれの担当科目の中でLAの候補者を発掘、発見します。既習者をLAとして採用するのは、その科目のことも、教師の科目に対する願いも分かっており、その科目の中で知的なプロセスを体験し、しかもそれを自分の言葉で次の受講生に伝えられるからです。教師はそのようにして発掘した人材を主として当該科目の授業時間を通して育てていきます。とはいえ彼ら彼女たちにも時間割などの都合があるので、必ずしも既習科目に配置されるとは限りません。しかし案ずるには及ばないのです。今までに授業を受けたことのない教師のクラス、科目であってもLAとしての業務の遂行に支障はありません。もともとキャパシティ、アビリティを見込んでリクルートしているからです。特殊なケースをのぞいて、グループワークのファシリテーション、モデル・プレゼンテーションなどを上手に遂行できることがリクルートの際の大まかな基準となります。

LAの具体的な業務内容ですが、グループワークにおいて、今、申し上げたようにファシリテーションをします。つまりグループワークが滞りなく展開するように助言をしたり、課題を発見するのを手伝ったりします。決して「答」を手取り足取り教えるようなことはしません。学生から質問があった場合には、例えば「それってどういうことだと思う？」と、問いに対して問いを返すようなかたちで次第に核心に近づいていくようなアドバイスやサジェスションをしたり、グループワークのつつがない展開を手助けしたり、場合によっては「では、そのことについてプレゼンテーションを来週みんなの前でやってみよう」とモデル・プレゼンテーションをしたりしています。同じ学生でも大学院学生を相手に感じる距離も、年齢の近い学部学生なら抱くこともなく、授業の内容に関すること以外にも相談を持ちかけたりして、自然に親しくなっているようです。

学生が教師に面と向かっては言いにくいことでもLAがキャッチしてくれますし、教室の隅々にまで目が行き渡らないときに、「こちらのグループではこういうことが起きています

が、このような対応でいいでしょうか」と逐次報告を入れてくれます。「では、その対応でお願いします。あとのフォローも頼みますね」というようなキャッチボールのあるおかげで、クラス内のあらゆる情報が教師のもとに集まり、学生一人ひとりのことを、まるで自分が常時、直に接したかのように掌握、把握することができます。これも LA の魅力の一つですが、もっとも魅力的なのは受講生が授業に積極的に参加するようになることです。

LA は学生の反応を間近で見て、感じ取っていますから、それを勘案しての提案をしてくれることがしばしばあります。それは授業の方法に関する助言になります。まさに LA と教師が授業をつくっているのだと言っても過言ではありません。そのような共同作業で作る授業だからこそ受講生が能動的に参加するようになるのだと思います。そのためになくはない存在、アクティブ・ラーニングの大きな原動力になっているのが我が関西大学の LA です。

最近の風潮ですが、こと、教育の改善に着手すると、アウトカムはどうなっているのか、いかなる効果が上がったのかを数字で示せという声があがります。しかし数字で示せることと示せないことがあります。アクティブ・ラーニングのおかげで視野が広がった、理解が深まったといっても、広がった視界を角度で表すことも、深まった理解を距離で示すこともできません。アウトカムは授業を担当している教師や授業を受けた学生、そしてそれを支援している LA の実感にまさるものはないと思っています。ここからは数字で示せるものをご紹介します。

LA 制度は 2009 年に始まりましたが、その数は年を追うごとに増えています。現時点で 68 名を数えるまでになりました。LA を活用しているクラスは初年度の 2009 年に比べて 5 倍に増え、LA を活用している教師は約 10 倍になっています。

これに並行するかのようになり、スタディスキルゼミに対する人気が高まり、クラス数を増やさなければならなくなりました。そのクラス数は 40 クラスあったものが 56 クラスへと 1.4 倍に増えています。実はこれを大幅に上回る志願者増があるのですが、あまりに共通科目が肥大化するのはどうかと懸念する声があり、ある程度のところで制限をかけなくてはならなくなりました。ですから実際にはクラス増を 1.4 倍程度におさえた、ということになります。スタディスキルゼミの受講者も当初の 663 名に比べると倍増しています。これを要するに、LA の魅力、LA が活動しているクラスの素晴らしさは、わざわざアナウンスしなくても学生が自然に集まってくる、ということです。授業で活躍する LA の姿を見て自ら LA を志願する学生も増えてきました。

さて、このようにして発掘、発見した LA の育て方ですが、第一義的には OJT に意味があると考え、実践しています。LA として初めての業務に就く際には、必ずベテラン、シニアの LA のいるクラスに配属します。先輩の活動を見ながら様々なことを学んでほしいからです。これとは別に LA 研修が年に少なくとも二度は開催されます。当初は教員やスタッフが研修企画のデザインをしていましたが、LA が育ってくるにつれ、自分たちにいま必要なものは何かがわかってくるので、皆でアイデアを出し合って、学生中心の企画がなされる

ようになっています。現在は大勢のフロントランナーの卒業を前に、いかに後輩にバトンをリレーするか、それが課題です。

私の方からは、ここで一旦話を終わりにいたしまして、LA のみなさんにバトンをお渡しします。

【二タ見佳恵】

私が LA になりたいと願ったきっかけ、理由は、授業でお世話になった LA にあこがれの先輩がいたからです。大学入学時は、高等学校から大学に生活の舞台が移り変わっていく中で、劇的な変化があると思っていました。自分が大学生になれば、きっと理想の素敵な大人になれるのではないかというイメージがありました。実際はそんなことはなく、高校生の自分から大学生の自分というのが地続きで、変化はありませんでした。

そんな時に三浦先生のスタディスキルゼミを受講して、そこで LA に初めて出会いました。その先輩 LA はとてもスマートにプレゼンテーションをしたり、ファシリテーションをしたり、とても知的なお話を聞かせてくださったり、自分がなりたい理想の大学生がそこにありました。そこで「私もそうになりたい」と思い、LA になったのです。

【東城英美】

私が LA になったきっかけは、三浦先生の授業です。私が 1 年生のときに受けた大学生活で初めての授業が三浦先生の「文章力をみがく」という授業でした。大学生というと、大きく広い教室で、先生が前の教壇に立って話をし、学生はノートを取るだけというイメージがあったのですが、三浦先生の授業は逆でした。学生と掛け合い、学生からのレスポンスを待ち、それを活かして、次の話につなげるために盛り上げるという流れ、動きのある授業がとても楽しかったのです。「来週も行きたいな。次はどんな授業をしてくれるのだろう」というように毎日がすごく楽しみな授業でした。それはなぜだろうと考えたときに、先生と受講生の距離が近いからだと分かりました。

半年間、先生の楽しい授業を受けましたが、最後の授業が終わった後に「LA 制度が始まりますが、あなたもやってみませんか」と三浦先生から声を掛けていただき、LA になることにしました。

LA の役割は学習支援ですが、これは大きなくくりで、人によって得意とする業務、主として遂行する役割はさまざまです。プレゼンのスキルのある A さんにはプレゼンテーションを学生の前で披露してもらい、ノートテイクが上手な B さんにはノートテイクの授業に入ってもらおう。つまり誰もが同じ役割を均等に遂行しているわけではないのです。私は何をしているかといいますと、場づくり、雰囲気づくりを主にしています。

私が場づくりの重要性を意識するようになったのは、受講生の気持ちに思いを馳せたからです。私たち LA は学生に授業を主体的に受けてほしいと願い、能動的に授業に参加してほしいと望んでいるのですが、そのために何が必要かを考えました。「次は何が起こるのだ

ろう」という好奇心があれば授業にすすんで行きたいと思うので、好奇心や「楽しさ」を学生に感じてもらうためにコミュニケーションが大事だと再確認しました。そういったコミュニケーションが自然にできるような雰囲気、場を作りたいと考えています。

LA は重要なミッションを帯びていますが、働き方は人それぞれで、まさに 10 人いたら十人十色です。誰もが同じ仕事をしているのではないのです。その意味では「顔がある」存在なのだと思います。

【竹村祐哉】

私は LA になって 2 年目です。1 回生の秋から LA の仕事をしているのですが、その経験に基づいて自分が考える LA の可能性について話したいと思います。

LA の可能性として思っていることは三つあります。LA は先生と学生をつなぐ役割を担っていますが、大学生活において必要なことや、充実した大学生活を送るためにはどうしたらいいかなど、学部生の先輩としてアドバイスできることなど、LA から学生に提供できる大切なことがあると思います。これが可能性の一つめです。

「大学教育論」という授業で、私はプレゼンテーションをしました。「大学教育論」は 1 回生から 4 回生まで受けられる全学共通科目の一般教養です。そこで私は学生に対して「皆さんは『大学教育論』を□している」という問いを出しました。その□を埋めるのに学生からは「受講している」「受けている」という言葉が出てくるのです。ところが『『大学教育論』を□している」の「を」を「に」に変えてみたところ、「参加している」という答えをもらいました。

そこで「受けるという受動的な考えではなく、自分は学びたくて大学に入ったのだという初心を思い出して授業に「参加」するというアクティブな考えを持って臨んでほしいと伝えました。この「大学教育論」は「大学の主人公は君たちだ」というサブテーマを持っているので、それに合ったプレゼンテーションを提供できたと思います。

二つめの可能性として、LA が授業のデザインに参加することがあげられます。このあとに「先生とともに」と続けたいのですが、今までは先生がシラバスを作って授業をデザインされていますが、そこに LA のアイデアなどを加えるとより良いものになるのではないかなと思います。LA が入っているクラスでは授業後に先生と LA とがグループ編成や、学生の状況等、授業運営について話し合いをした上で次の授業に臨むことができます。そこで LA 自身も 90 分間で感じたことを素直に先生に伝え、次の授業のデザインにそのことを反映させることができますと思います。

授業時間内に、学生によるプレゼンテーションの時には司会を務めることがあります。そこで発表者の学生とキャッチボールができるのですね。そのキャッチボールをベースにオーディエンスの学生に問いかけることもできます。学生ならではの問いかけになっていると思います。このほかに、ノートテイキング、板書、学生からのコメントへの返答も LA が担うこともあります。このような活動をした LA の意見を取り入れると、学生のニーズに

より近い授業を展開することができるのではないかと思います。学生も積極的に参加するようになるはずです。

三つめの可能性は「学びやの外にあり」と思っています。LAは主に授業の中で活動していますが、授業時間以外にも活動をしています。例えば学園祭でLAの活動を紹介するブースを作る、他大学でのポスターセッションに参加する、など、LAの活動領域は教室の外にも広がっているのだと思います。特に新入生に対しては履修登録の前にLAから学生生活全般や学習に関するアドバイスができる機会や場があればよいと思います。以上、LAの可能性を三つ挙げさせていただきました。

3. PBL型授業について

時間が残っているので、再び私がバトンを持つ事にします。

LAを活用しているクラスのほとんどがPBL型授業を展開しています。実は関西大学に来るまでPBL型の授業をやったことがありませんでした。存在は知っていましたが、やり方をよくは知りませんでした。もちろん学生時代に受けたことなどありません。その時代にそのような授業は日本には存在していなかったと思います。

したがってクラスサイズの大小にかかわらずトーク・アンド・チョーク (talk and chalk) の授業をするばかりでした。そのような実践を重ねてきた人間がグループワークをメインとしたPBL型の授業を実践するのは、それこそ一大事でした。しかし、今日に至るまでなんとかPBL型の授業をすすめてこられたのはLAのおかげだと思っています。

東城さんが初めてLAの任に就いたときが、私は初めてLAを活用したときです。PBLの経験もなければLAと一緒に授業をしたこともない、不安だらけのスタートでしたが、同じ様に初めて尽くしのLAに随分と助けられました。迷っているとき、動き出せないでいるときに、どうしたらよいのかを実によりタイミングで教えてくれたのです。つまり私は学生に教えられてPBL型授業のノウハウを少しずつ身につけているのだと思います。

ところで讀賣新聞の教育班が毎年『大学の實力』を出していますが、2011年と2012年には、PBL型授業に関するデータ、情報が掲載されていたのに、2013年には一切のデータがなくなりました。その理由はわかりかねますが、もしかしたらPBL型の授業を実施する大学あるいは学部が激減したことがその背景にあるのかもしれませんが。2011年版と2012年版とを比べてみるとPBL型授業を全学展開している大学が激減しています。そもそもデータの取り方に問題があったのか、PBL型授業に対する誤解・齟齬があったのか、返答する部署の認識に違いがあったのか、事情はわかりませんが、もしかしたらPBL型授業に飛びついてはみたものの、やってみてうまくいかないからやめた、ということが多くの大学で起こっているのかもしれませんが。

PBL 型の授業に関する本が何冊も出版されており、ハウツーが示されていますが、大切なことは学生を信じることだと思います。ハウツーばかりに目が向いてしまい、学生を信じることを二の次三の次にすれば PBL 型の授業は失敗します。

先ほど、知識を与えることよりも知識を獲得するプロセスを学生に体験、体感させること、知識の転移からの脱皮を図ることの方が大切である、意味があるというお話をしました。PBL 型授業を展開する理由もそこにあります。ただし、二点ほど気になることがあります。

一つめはガイディング・クエスチョン (guiding question) のありかたです。この種のテキストにはガイディング・クエスチョンの例が数多く示されています。これを作り込むのは確かに大切なことですが、答を得ることだけを促すようなものであるのあら、ない方がましです。何が「問い」になるのか、「問い」としての価値を持つのか、そういったことを考えることのできる仕掛けにしないと、答を求めるための「問い」でしかなくなってしまいます。それでは高校の授業と違いがなくなってしまいます。ガイディングとは「答」をみちびくためのガイドではなく、知の探検にいざなうガイドであってほしい、あるべきだと思います。

二つめはグルーピングです。PBL 型の授業はパーソナルワークでも展開できますが、やはりグループワークが主流です。したがってテキストにはグループワークについての記述がなされています。しかしながらグルーピングについて頁をさいているテキストはほとんどありません。男女比に偏りがないように、学部が重ならないように、学年が均等に散らばるように配慮してグループを作っているのにグループワークがうまくいかない、だから PBL が思うように進まないと思っている教師が、もしかしたら数多くいるのかもしれませんが。様々なことに配慮してグループを編成するのは重要ですが、さらに大切なのはグルーピングのプロセスに学生を参加させることだと思います。私のこの数年間の試みから得た一つの仮説です。金科玉条にしてはならないと思いますが、少しでもご参考になればと思います。

また、さきほど “what not to teach” の話をしました。それは学生に「問い」を発見する機会を残しておくために必要だと考えるからです。少し趣が異なりますが、このことに関わることだと思うので「よい授業とはどのような授業か」ということについてお話をしたいと思います。

直行する二本の軸を頭の中に描いてください。縦軸 (y 軸) が「おもしろい」(おもしろさの度合い) を示し、横軸 (x 軸) が「わかる」(わかりやすさの度合い) を示すとします。二本の軸で作られる四つの象限のうち、第一象限が「おもしろくて、わかる」、第二象限が「おもしろいけれど、わからない」、第三象限が「おもしろくないし、わからない」、第四象限が「おもしろくないけれど、わかる」というように分類できます。さてこの四類型を良い授業だと思う順番に並べ替えてみてください。みなさんに聞いてみましょうか。

わからなくて、つまらない授業が一番良いと思う方、いらっしゃいませんね。

わかるけれどもつまらない授業が一番良いと思う方、これもいらっしゃいません。

わからないけれども面白い授業が一番良いと思う方、三名いらっしゃいました。

では、念のために、面白くてわかる授業が一番良いと思う方、圧倒的多数ですね。時間の都合で順番に並べていただくことはできませんでしたが、これだけでも教師と学生の違いが現れます。

同じ質問を学生に向けると返ってくる答が教師とは異なる場合がとても多いのです。印象的だったのは大学院進学を考えているような学生たちが「わからないけれど面白い授業」が一番良い授業だと答えてくれたことです。ここに言う「面白い」は、もちろん“funny”ではなく“interesting”ですが、「わからない」は「教え方がまずくてわからない」という意味ではありません。彼ら彼女たちは「ここまではわかる。この先がわからない。でも、わからないことがある、それがおもしろいのだ」というように解釈しています。その「わからない」ことを教師が授業で教えてくれるのか、くれないのか、それは彼ら彼女たちにとってはさほど大きな問題ではありません。自分たちが何処まで分かっている、どこから分からないのか、それを知ることができていること、そして分からないことがあるために知的好奇心が刺激されること、それが面白さの中身であり、そういったことを気付かせてくれる授業がよい授業であると判断しているのですね。

学生に理解させること、ほとんどの教師はこれを自らのミッションとして自明視しているようですが、ある種の職業病のようなものなのかもしれません。教えなくても学生が知的好奇心を刺激されれば、彼ら彼女たちは自ら知的探検の旅に乗り出していくのでしょうか。

「良い授業」を定義するのは難しいのですが、学生と教師とで「授業観」に違いがあることは知っておかなければなりません。関西大学の場合、この違いを教えてくれるのがLAなのだと申し添えて、お話を終えようと思います。ご静聴ありがとうございました。

4. 參考資料

三者協働型
アクティブラーニングの展開
～ LA 讃歌 ～

三浦 真琴

1

アクティブラーニング入門一歩前

門の一步手前で...
門をくぐって一步前へ

アクティブラーニング入門一歩前 2

パラダイムシフト

- 「教員中心主義」から「学生中心主義へ」
- 勉強から学習へ、そして楽習へ
- “How to Teach”から“How to Learn”へ

3

パラダイムシフト

- 「教員観」
- 「学習観」 の変革
- 「教育観」

4

チャンスを手にするために

- 教師の願いをより確かに学生に伝えたい
- 教師の「何か」を変えたい
- それを学生を変える「何か」につなげたい

5

しかけ
伝える「装置」

- 教師の願いを「誰か」の「声」に託してみる
- 教師の思いを「誰か」の「行動」に反映させてみる
- 教師の望みを「誰か」の「姿勢」にゆだねてみる

6

学生の「ちから」に注目

- 発声の内容と分量を変える
- 見せる背中も変えて(換えて)みる
- 見せる「何か」が変わってくる
- 見せない「何か」が生まれてくる

7

Active Learning の実現に向けて

- PBL型の授業を徐々に展開したい
- 学生の参加を促す「ちから」がほしい
- その「ちから」は「上」から降りてくるのではなく
「下」「横」から湧いてくるものであってほしい

8

既にある経験・環境・智慧を活かす

- 授業支援SA
 - 学習支援に特化したLAへ
- 「スタディスキルゼミ」
 - 科目内容を細分化

9

LA(Learning Assistant)という発想

主に初年次学生を対象とした科目(群)において
「知識の転移」という教師中心の発想から脱した
「知的プロセス」の想像的・創造的体験を核とする
授業(学習機会)をわかりやすい「かたち」で
展開するために必要な人材

10

スタディスキル科目の展開

2009年 : 「スタディスキルを身につける」(1科目)

2010年 : 「スタディスキルゼミ」

テーマ別に展開=科目数増加 : 6科目へ
受講対象の拡大 : 学年不問

2011年 : テーマ増(6科目→7科目)

年度	2008年	2009年	2010年	2011年
履修者	437名	663名	701名	1087名
希望者	—	—	1042名	2274名

11

テーマ	レベル
ノートをまとめる	基礎的なレベル
パソコンで学ぶ	
新聞で学ぶ	
レポートを作成する	導入教育として 中核的なレベル
プレゼンテーション	
課題探求	応用的なレベル
ディベート	

12

LAが活動するその他の科目

- **大学教育論**
グループワーク形式で展開する全学共通科目(多人数授業)
- **関西大学ピア・コミュニティ入門&演習**
「ピア・コミュニティ」で活動する学生スタッフ「ピア・サポータ」(及び志望者)を対象とする全学共通科目
- **「文章力をみがく」・「論理的に考える」**
一部のクラスでグループワーク形式の授業を実施

13

LAの発掘・発見

LA候補生

⇨

悉皆研修

科目配属

⇨

LAとして活動

授業支援SA

授業支援ステーション事務職員が推薦

受講生

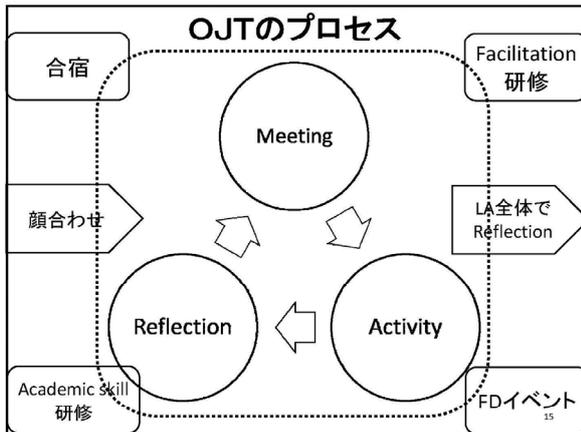
受講生の中から担当教員が推薦 他

教員A: 授業へのコミットメントが高いこと / GWIにおける他メンバーへの気配り

教員B: 分析的な視点から自らの気づきを文字化できる / 授業を通じて成長が見られる

教員C: 責任感を持っている / 授業を「価値あるもの」として楽しく受講している

14



LA研修

ファシリテーション研修				
	第一回	第二回	第三回	第四回
年月	2010年1月	2010年9月	2011年3月	2011年9月
テーマ	聴き方	合意形成の促し方	主張の仕方	自己研鑽の仕方
講師	外部講師			AS
アカデミックスキル研修				
	第一回	第二回	第三回	
年月	2010年2月	2010年11月	2011年10月	
テーマ	プレゼンの技法	クリティカルシンキング	ディスカッション	
企画・運営	LA			

16

LAの活躍

モチベーションの刺激

「教員の働きかけ」 < 「LAの発表を見聞きすること」
 「LAのアドバイスを受けること」

LAの評価

LAの熱意・努力	96%
LAの説明の分かりやすさ	87%
LAと教員の連携	93%
円滑なグループワークへの貢献	87%

(2009年春学期受講者アンケート: N=71)

17

LAの活動の実態

LAたちはどんな活動をしたのか?
 ~ 2011年春学期のLAたちのReflection Paperのトレース結果から ~

受講生支援	平均		
グループ内ファシリテーション	35.3%	教員支援	平均
全体ファシリテーション	28.5%		
マンツーマン支援	11.0%	運営支援	40.8%
手本を示す	13.3%	デザイン	9.1%
授業外アドバイス	5.2%	待機	24.6%

18

受講者の声

自分もあんな風に堂々と人前で喋れたらいいなと思いました。

ラーニングモデル

説明がわかりやすかった。(ディベートなら、お互いの良い部分悪い部分をしっかりと指摘してくれた)

LAの方の知識が豊富でとても役に立ちました。

先生のお話を聞いて、授業がとて分かりやすくなりました。

LAの方が色々わかりやすく授業のことを話してくださって、尊敬しました。

先生のお話を聞いて、授業がとて分かりやすくなりました。

ディベートを行うための例を实践していただき、とても有益でした。

メッセージ

『週刊スタスキ』を発行し、図書館の利用方法とか大学生生活の過ごし方を教えてくれました。

LAと一緒に授業が行なわれ、私達にアドバイスしてくれました。

ファシリテーター

LAのアクティビティの広がり

- ☆「スタスキ新聞」・「LA通信」の発行
- ☆学部専門科目への出張
- ☆学内各種行事への参加
- ☆学外各種行事への参加

20

LAのアクティビティの広がり ～学内の各種行事への参加～

2010年7月	社会安全学部主催初年次学生向けワークショップ(ファシリテーター)
8月	ワークショップ型情報交換会(自主企画・運営)
11月	学園祭での研究発表
2011年2月	リフレクション合宿(自主企画・運営)
8月	教職課程科目「総合演習」(ファシリテーター)
10月	アカデミックスキル(ディスカッション)研修合宿(自主企画・運営)
10月	アカデミックライティング講座(ファシリテーター)
11月	学園祭での研究発表
2011年11月	アカデミックライティング講座(ファシリテーター)
12月	アカデミックライティング講座(ファシリテーター) (以下略)

21

■ 学外の各種行事への参加

出張時期	行事名	場所	内容	参加LA
2010年4月	関西地区FD連絡協議会	京都大学	ポスターセッション	5人
2011年1月	大学教育改革プログラム合同フォーラム	東京	ポスターセッション(準備のみ)	6人
2011年5月	関西地区FD連絡協議会	京都大学	ポスターセッション	6人
2011年8月	学生FDサミット	立命館大学	グループワーク プレゼンテーション	3人
2011年9月	i * see 2011	岡山大学	グループワーク プレゼンテーション	5人
2011年11月	学生のWall	追手門学院大学	グループワーク プレゼンテーション	6人

22



LA Learning Assistant

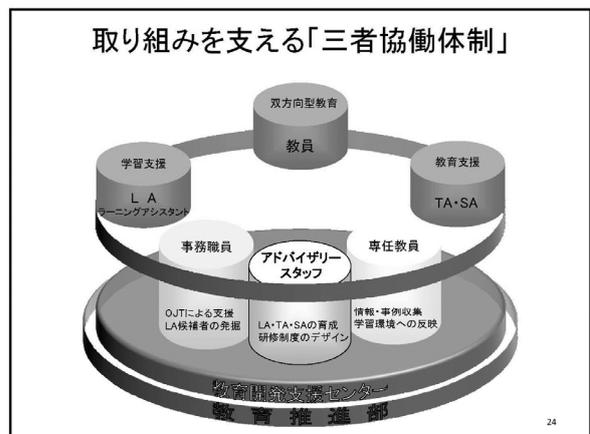
- 初年次教育科目に於ける補助授業モデルとしての活動
- 学内・学外での活動
- 学内での活動
- 学外での活動
- 学内での活動
- 学外での活動
- 学内での活動
- 学外での活動

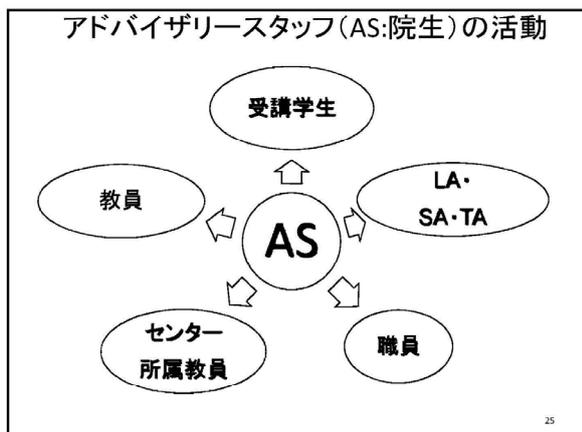
関西大学教育開発支援センター <http://www.kanai-u.ac.jp/la/>



WHAT'S LA?





- アドバイザースタッフ(AS:院生)の活動
- 教員の授業コンサルテーション
 - ICT活用支援
 - 教員へのヒアリング
 - LA養成のための研修プログラムの立案・実施の支援
 - LAを活用した授業コンテンツの研究開発
 - アクティブ・ラーニングに関する研究
 - 各種ワークショップデザイン
- 26

本取り組みの経過

	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
LAの数	12名	38名	47名	68名
LA活用クラス数	10クラス	23クラス	39クラス	53クラス
LA活用教員数	2名	11名	14名	19名
スタディスキルゼミ クラス数	40クラス	46クラス	54クラス	56クラス
スタディスキルゼミ 受講者数	663名	704名	1087名	1180名

27

- 再度
パラダイムシフトの中で「教育力」を考える
- ✓ “How to Teach”からの脱却
 - ✓ “How to Learn”へのまなざし
 - ✓ “What not to Teach”の発想
- 学習支援力
 - 学習デザイン力
- 28



大阪商業大学 FDニュースレター 第11号

発行日：2013年3月15日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-8438